
指先の星

あと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
指先の星

【Nコード】
N6106Y

【作者名】
あると

【あらすじ】
流星が降る夜、彼が空を指さした。

（前書き）

しし座流星群が訪れる夜。
どこかでこんな物語があるかもしれません。

「ねえ」

「んー」

生返事をする彼は、こっちを見ようとしなない。

「話って何なの」

こんな時間に呼び出されたのは、初めてだった。家が近いこともあって、急に電話がかかってくることはあっても、今までは昼間の出来事だった。

「ああ」

また、生返事だ。

手が冷たくなってきた。手袋をしてくればよかった。

あたためて欲しいと思って、彼を見ただけで、両手はポケットの中だった。

「見てみる！」

彼が空を指差した。

「あ」

星が落ちてくる。

薄い雲が月を隠したその隣りで、強い光が現れて、あっという間に消えてなくなった。そう思ったのも束の間、空が輝き出した。

「すごい」

数え切れないほどの光が、白い筋を夜空に描いていく。

「しし座流星群。今日がピークなんだぜ」

だから、夜中に呼び出したのだ。いつもと違う電話に、少しだけ期待していたけれど、これはこれで嬉しい驚きだった。

「寒いか」

「……うん」

手を握ってくれた。ずっとポケットに入っていた彼の手は、少し湿っていて、あたたかかった。

「あれ？」

手のひらに固い物があたっていた。

彼が照れくさそうに微笑んだ。

「プレゼント」

見てみると、一粒石の指輪だった。

「流星群みたいにかくさん石がついてないけどさ。これが俺の気持ちだ」

打って変わって真剣な表情をする彼に、ようやく頭が追いついてきた。

「これって」

彼は黙って、指輪を薬指にはめてくれた。

「来年も、お前と流星群を見たいんだ」

手が湿っていたのは、緊張していたからなのだろう。生返事は、きつかけを待っていたのだろう。

「再来年も、その先も、ずっと一緒に見るわ。ちゃんとあつためてくれたらね」

彼が両手を包み込んでくれた。向かい合う姿勢で見つめ合った。

手袋は、もう少しおあずけにしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6106y/>

指先の星

2011年11月18日11時40分発行